

明治四十一年創業 中山道高宮宿
Tanakaya-communication

田中家通信

全優后 全額優良石材店

お盆です。お仏壇とお墓に手をあわせましょう。

お盆とは、先祖があつた世から帰ってきて一緒に楽しいひとときを過ごし、また帰っていくという日本古来の信仰に基づいた行事です。

日本では、仏教伝来以前から「御霊(魂)祭り」など、先祖の霊を迎える儀式が存在しました。推古天皇(六百六年)の時代、僧を招き食事や様々な仏事が行なわれ、それが「お盆」の原型になったと考えられています。朝廷で始まったお盆は、江戸時代になって一般庶民に広がりました。元々日本人が持ち合わせていた「祖先を供養する心」と結びつき今日まで受け継がれてきています。

初盆

人が亡くなって初めて迎えるお盆のことを「新盆(にいぼん)」あるいは「初盆」と呼びます。故人が仏になって初めて里帰りするということで、近親者は盆ちようちんを贈り(現在は現金

を贈ることが多い)、初盆を迎える家では身内や親しい者を招いて僧侶にお経をあげてもらい供養されます。※宗派によって、するしない、等やり方は異なります。

先祖と食事

お盆に里帰りをされたときに、お仏壇、お墓参りは大事なことです。もう一つ大切なことがあります。それは、家族がそろって仏間のお仏壇の前で「一緒に食事」をし、その団欒の中で、それぞれの近況を語り合い、特に先祖や故人の生前の話を覚えている限りしてあげて、ともに食事をするのが供養になり喜んでもらえる大事なことです。このことはお正月でもいえることです。遠方で帰郷できない場合は、近隣の同じ宗派のお寺等にお参りをして、ご本尊に手を合わせ先祖の往生を願う、日頃の感謝の気持ちを先祖に伝えることが大切なことだと思えます。

夏の風物詩 花火

花火の歴史

花火はもともと古代中国で発明され、戦争時の「のろし」として使われていました。「のろし」としての役割から現在の鑑賞用火火へと発展していったようです。

日本の花火の歴史は一五四三年に種子島に鉄砲と火薬が伝来したことに始まります。

一六一三年に花火名人のイギリス人が徳川家康の為に花火を披露したのが、日本での花火第一号であると言われています。当時の花火は、竹の節を抜いた筒に黒色火薬をつめて、その一端に点火し火の粉を吹き出させる、いわゆる「立火」と呼ばれるものでした。やがて花火は、将軍家や諸大名など身分の高い人々の間で広まり、隅田川では花火の打ち上げが年中行事になりました。これが現在も続いている隅田川の花火大会の始まりです。

たまや〜かぎや〜

花火といえば、「たまや〜かぎや〜」という掛け声があります。これは江戸時代の「玉屋」と「鍵屋」という江戸の二大花火師に由来しています。



現在の隅田川花火大会の原型である「両国の川開き」が一七三三年に行われた時に、花火師を勤めたのが六代目「鍵屋弥兵衛」という花火師でした。この時の花火が江戸中で大評判となり鍵屋の名前が広まりました。その後鍵屋の七代目清七という花火師が鍵屋から分家して「玉屋」という花火業者を始めました。以後、両国の川開きは、上流に玉屋、下流に鍵屋がそれぞれ舟を出し、2大花火師が技を競い合っている、民衆が「たまや〜、かぎや〜」という掛け声を掛け合いながら花火を鑑賞していたといわれています。現在まで「たまや〜、かぎや〜」という掛け声は当時の名残として受け継がれています。

株式会社田中家石材

VOL. 15
発行/株式会社 田中家石材
住所/彦根市高宮町1-08-1
電話/0749(50)50000
HP: <http://www.tanakaya-sekizai.com/>
Mail: info@tanakaya-sekizai.com

日本の粋な文化

「医者に金を払うよりも、みそ屋に払え」

江戸時代のことわざに、「医者に金を払うよりも、みそ屋に払え」という言葉があります。味噌は昔から朝夕食に用い、1日も欠かしてはならないとされてきました。

味噌は、老化防止や胃腸病の防止、がん予防など様々な効果があるとされています。その塩辛い味から塩分の高い食品と誤解されがちですが、現代人が食べている食品の中では塩分の比較的少ない健康食品と言う事ができます。

全国的に製造されている味噌ですが、各地方ごとに色々な特徴があります。関西では甘口の白味噌、関東では辛口の赤味噌が主流で、お正月に食べるお雑煮の色や味に違いがあるのもこの味噌の種類の違いによります。

我が家の家紋

◆鷹の羽紋(たかのはもん)

日本十大紋のひとつ。その美しい姿、雄々しい振る舞いはもちろんのこと、鷹狩りなどでも存じのように鷹は太古から人間と関わりを深く持つていたようです。

古来より武家にはとても人気のあるシンボルだったようで、武礼の被り物に鷹の羽を差すなどの習慣もあつたようです。江戸時代にはじつに120家の大名旗本がこの鷹の羽紋を用いていたようで、武人に好まれた紋でありました。

人気のあるものは羽根を交差させた違い鷹の羽系です。忠臣蔵でお馴染みの浅野内匠頭、阿蘇神社の神紋、その流れを汲むという菊地一族が「違い鷹の羽」を使用しています。
あの西郷隆盛も菊地氏族で「違い鷹の羽」を用いていました。

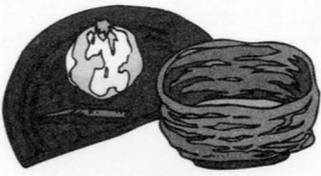


茶道 千利休の教え

現在の茶道の原型を完成させた千利休は茶道の心得を、『四規七則(しきしそく)』と説きました。『四規』とは和敬清寂(わけいせいじゃく)の精神を言います。

和…お互い仲良くする事。
敬…お互い敬いあう事。
清…見た目だけでなく心の清らかさの事。
寂…どんな時にも動じない心の事。
『七則』とは、他人に接するときの以下七つの心構えです。

「茶は服のよきように点て、炭は湯の沸くように置き、冬は暖かく夏は涼しく、花は野にあるように入れ、刻限は早めに、降らずとも雨具の用意、相客に心せよ」つまり、「心をこめる、本質を見極め、季節感を大切に、いのちを尊び、ゆとりをもち、やわらかい心を持ち、たがいに尊重しあう」のが大切だということです。



◆桐紋(きりもん)

古代中国では、桐の木は想像上の瑞鳥「鳳凰」がきて「聖天子誕生、聖天子誕生」と鳴くめでたい木とされてきました。そのため桐は聖天子のシンボルとなり、日本の皇室でも菊の紋章と並んで桐が副紋として使用されるようになりました。

皇室が臣下へ、さらに下賜された武將がその臣下へ与えるというかたちで徐々に桐紋が増えていったようです。その中には豊臣秀吉もおり、彼はその桐紋を愛し、おのれの権力を誇示するために工芸美術品の多くにつけられ、桃山時代の美術品の多くには太閤桐と呼ばれる紋がすえられていました。

豊臣秀吉が多くの家臣に与えたことから西日本に多く見られます。また、この桐紋は政府の紋章にも使われています。花の数を単位とした五三の桐、五七の桐などがよく知られています。

